

# ユダヤ人の「文化的自治」における言語 ナタン・ビルンバウムの評論活動を中心に

佐々木 茂人

## はじめに

ローマ軍による第二神殿破壊（紀元 70 年）以降、ユダヤ人は世界各地へ「離散」し、文字通りの「グローバル・ディアスポラ」を経験した。それは、故郷であるイスラエルとの分離による伝統との断絶を意味したが、その一方で、居住する地域の文化を巧みに取り込み、新たなアイデンティティを創造することをも意味した。<sup>1)</sup>

こうしてイスラエルから離れたユダヤ人の中で、アシュケナージと呼ばれる、主にヨーロッパ中部に移住した人々は、社会的な必要性から中世ドイツ語をベースにして、ヘブライ語、アラム語の混在した言葉を用いていた。その後、この言葉は、商業的理由、あるいは十字軍、ペストなどに際して生じた迫害によってその話者が東欧へ移動するに伴い、さらにスラブ語の要素を加えた。そして、18 世紀には「イディッシュ語」という言語が形成される。<sup>2)</sup>

このように、まさにディアスポラ経験から創造されたイディッシュ語は、19 世紀後半にはさまざまな観点から蔑視されるようになる。とりわけ、ドイツ語圏では、その話者である東欧のユダヤ人の経済状況と結び付けられ、劣等な言葉として嘲笑の的となった。だが、前世紀転換期のオーストリア帝国に、イディッシュ語主義（Yiddishism）という、この言語を擁護し、積極的に評価する運動が興る。それは、次第に集権力を失いつつあった帝国と、反ユダヤ主義などの社会的弊害に対する、ユダヤ人の権利要求の一表現であったが、シオニズムとも社会主義とも一線を画していた。この運動は、あくまでイディッシュ語の文化的側面を強調し、オーストリア帝国における民族自治を求めたのである。

本稿では、この運動の実質的牽引役を果たした評論家、ナタン・ビルンバウム<sup>3)</sup>に焦点を当て、その評論活動を通して、自治運動におけ

る言語の問題について論じる。最初にイディッシュ語に関する偏見への反駁を描出し、次にイディッシュ語にもとづいて構想された「文化的自治」(cultural autonomy)を再構成する。そして最後に、1908年に開催された世界最初のイディッシュ語の言語会議について考察したい。

## 1. 「文化言語」としてのイディッシュ語

### 1.1. 偏見に対する反駁

ビルンバウムが、自覚的なイディッシュ語主義者として活動しはじめる時期は確定できないが、1897年の第一回世界シオニスト会議はその一つの目安となる。この会議においてビルンバウムは、ヘルツルと袂を分かち、以降シオニズムを批判する側へと回るが、その原因として、リーダーシップをめぐる確執の他に、ユダヤ文化に対する意見の隔たりが想定されているからである。<sup>4)</sup>『ユダヤ人国家』に端的に表れているように、当時のシオニズムはイディッシュ語を「萎えて押しつぶされたジャルゴン」ないしは「ゲッター言語」とし、<sup>5)</sup>ヘブライ語と共にイディッシュ語をもシオニストの未来に有用と考えていたビルンバウムと対立していた。<sup>6)</sup>いずれにしても、この会議以降、ビルンバウムの評論には、イディッシュ語とその文化を積極的にアピールする姿勢が見られるようになる。

1910年に出版された『選集』に収録された評論の中で、イディッシュ語について論じられている最も古いものは、1901年の『ユダヤ人と演劇』<sup>7)</sup>である。ドイツ語圏における最初のイディッシュ演劇論と考えられるこの評論では、シュニッツラーなどの「ドイツ ユダヤ系作家」の演劇が「社会劇」(Milieudrama)として一括りにされ、「発展が十分に期待される」東欧のユダヤ人の演劇と対置されている。もっとも、当時はようやく劇団が形を成し、「イディッシュ演劇の父」と呼ばれるアブローム・ゴールドファーデンが登場して歴史劇を上演していたにすぎず、ビルンバウムもその芸術的な価値についてはあまり評価していない。

この評論には、イディッシュ語の組成、音(響き)などについての見解が簡単に述べられている。たとえば、イディッシュ語は「ドイツ化に対抗する、ユダヤ民族の魂の長きに渡る闘い」によって形成されている、あるいは、イディッシュ語の中にあるドイツ語は「非ドイツ語化されて

いる」など、また、その音は「耳障り」とされるが、「そのような音の評価は、主観的な感覚にもとづくのではないか」などと論じられている。一見して分かるように、これらの論述は、その頃ドイツ語圏においてイディッシュ語に付与されていた偏見に反駁したものである。

じっさい、イディッシュ語の評価にあたって、ビルンバウムの最初の課題となったのは、ドイツ語圏における偏見の払拭であった。ヘーデルは、ドイツ啓蒙主義の言説において、東欧の乏しい経済状況が精神的貧困と結びつけられ、さらには身体の異常をも含意するようになった経緯を描き出しているが、<sup>8)</sup> それによれば、ユダヤ人の窮状を解決する手段として、まず教育制度の見直しが行われたという。そして、とくに、東欧のユダヤ人の宗教学校（ヘデル）において用いられているイディッシュ語は、「ユダヤ人が用いる 別種の、理解できない言葉の生きた証拠」であり、それゆえに「撃退されなければならない」と考えられたようだ。<sup>9)</sup>

さらには、イディッシュ語が中世ドイツ語をベースにしている点からも偏見が生まれていた。たとえば、外国語としてのドイツ語を強調して、ユダヤ人にとってイディッシュ語とは「借り物の言葉」であるといった見解、母体となったドイツ語との相違を強調して、「イディッシュ語の音は汚い」あるいは「イディッシュ語には訛りがある」といった見解もあった。<sup>10)</sup> こうした偏見はドイツ語にも浸透し、mauscheln（訛りを話す）Kauderwelsch（めちゃめちゃ語）など、イディッシュ語を呼称するさいに用いる差別的な表現をつくりだした。さらには、これらの偏見がもととなり、19世紀後半に興ったハスカラ（ユダヤ啓蒙運動）においてイディッシュ語は、ポーランド語、ウクライナ語、ロシア語など、地域で社会的力を持つエスニシティの言語を習得する際の補助とみなされ、<sup>11)</sup> さらに、ヘルツル以降のシオニズムとユダヤ正統派の間では、「聖なる言語」であるヘブライ語に対して、教化の手段ないしはユダヤ人意識向上の道具とされた。<sup>12)</sup>

このようなイディッシュ語に対する偏見に関してビルンバウムは、先の評論から三年後の1904年に発表された『ユダヤ民族の言語』<sup>13)</sup> において激しく抗議している。これは、ヘブライ語とイディッシュ語それぞれの可能性について論じたものであるが、その重点はやや後者の評価におかれている。偏見とそれに対する反駁の論理は先のものと同様のもの、より具体的かつ詳細に論述されている。たとえば、イディッシュ

語の組成について先の評論では、英語が引き合いに出され、イディッシュ語がさまざまな言語を取り込みながらも統一を保っていることが暗に示されていた。一方、こちらでは、ドイツ語の親近性と関連付けて次のように述べられている。

多くの民族は外国語を吸収し、それを自らの精神で満たして、自分の言葉をつくりだしてきた。したがってユダヤ語<sup>14)</sup>は、借り受けたドイツ語以上のものである。それは、たとえば英語のような混交言語 (Sprachenmischung) であり、それゆえ創り手によって全く新たに産出された固有の言語であるのだ。

今日でいう「クレオール語」を思わせる反駁である。事実、続けてビルンバウムが論じるイディッシュ語の固有の価値からは、複数の言語から成り立ちながらも、差異によって創造性を得ている、ハイブリッドな言語としてのイディッシュ語像を読み解くことができる。ビルンバウムによれば、構成要素となったドイツ語、スラブ諸語、ヘブライ語に対し、イディッシュ語は、「陽気なユーモア」、「繊細なトーンと強調」、「論理の警句的性質」の三つの「特質」によって固有の言語になっているという。<sup>15)</sup> 最初のユーモアは、「胆汁質的なドイツ語、粘液質で憂鬱質なスラブ語のユーモアとは区別され、また、ヘブライ語のユーモアの欠如」とも異なる。また次の特質は、ドイツ語の「心情的感傷」やスラブ語の「神秘的な心情」、ヘブライ語の「虚勢」とも無縁であるという。最後の特質については、ヘブライ語の「鉄のごとき重量感」からは解放されているが、「広がりを持ったドイツ語」や「多弁なスラブ語」に比べれば、ヘブライ語に近いとされる。

このようなイディッシュ語評価の土台となっているのは、「離散」の特殊な捉え方である。「ディアスポラ・ナショナリズム」とも評されるその「離散」観によれば、ユダヤ人の社会的境遇はそれぞれの居住地域での発展によって「段階的に解消される」と考えられた。そのため、「離散」によって生み出されたイディッシュ語も、ビルンバウムにとっては決して劣った言語の状態にとどまらず、発展可能な言語とされたのである。<sup>16)</sup> 『ユダヤ民族の言語』には、イディッシュ語を「隷属の言葉」とする見解に対し、ユダヤ人の「解放」、つまり同権の獲得を踏まえな

から、「隷属の鎖から自由になった民族は、そのままの自分の言葉から  
も隷属の響きを取り去る」という言葉が見られる。<sup>17)</sup>

## 1. 2. 「文化言語」

偏見に反駁すると共に、ビルンバウムはイディッシュ語を広く認知し  
てもらおうと、さまざまな言説を展開している。中でも繰り返し行  
われているのが、「イディッシュ語のラテン文字化」の提案である。早  
くも 1902 年の『ヘブライ語とユダヤ語』<sup>18)</sup>には、「ヨーロッパでは遅れ  
た民族だけが非ラテン文字に固着している」、「ヨーロッパの文字で記さ  
れた（中略）ユダヤ語によって、非ユダヤ人の間で、ユダヤ人は自律的  
な文化民族であるというイメージがきわめて強くなる」という論述が見  
られる。<sup>19)</sup>そして、『ユダヤ民族の言語』では、「東方ユダヤ人<sup>20)</sup>の中で  
ユダヤ語に対する自覚的なはっきりとした誇りを芽生えさせ、ユダヤ語  
をヨーロッパ言語の一員にする」方途としてラテン文字化が掲げられて  
いる。<sup>21)</sup>

このイディッシュ語のラテン文字化の提案について注目すべきは、直  
前に引用した文章に見られる「ヨーロッパ言語の一員」である。じっさ  
いにビルンバウムにとってイディッシュ語は、ヨーロッパの諸言語に比  
肩しうる言語になると構想されていた。先の『ユダヤ人と演劇』では、  
「アジア人としてのユダヤ人」<sup>22)</sup>から「文化的ヨーロッパ人」への離脱  
が、「価値、理念、方法に富み、傑出した人々が増える」こと、また、  
「先に進み上昇しようという、十分に醸成された意志を内に持つ」こと  
によって可能であると説かれ、その主要な担い手としてイディッシュ語  
が位置づけられている。<sup>23)</sup>そして、イディッシュ語は、その「言葉の源  
泉の豊穡さ、内部の精神的統一、ヨーロッパ文明の精神的必要性への緩  
やかな馴化、生命と衝動、民族の創造、予感そして意志との直接的なつ  
ながりによって」、「日一日とヨーロッパ文明の生命力としなやかさを身  
に付けている」というのである。<sup>24)</sup>

もっとも、このようにイディッシュ語の価値を誇張する一方で、言語  
の発展を担う文化、とりわけ評論の対象であるイディッシュ演劇につい  
ては、「発展が十分に期待される」という以上の価値が認められなかつ  
た。だが、演劇以外のジャンルでは、ヨーロッパの言語文化に比すべき  
イディッシュ語作家が何人が現れていた。それが「近代イディッシュ文

学の創始者」とされる三人の作家、すなわちロシアのユダヤ人の現状を具に観察し、社会風刺小説、ピカレスク風の冒険譚などを執筆したメンデル・モイヘル・スフォルム、『牛乳屋デヴィエ』で日本人にもなじみのあるショレム・アレイヘム、そして、演劇と物語に優れていたイツホク・レイブシュ・ペレツであった。<sup>25)</sup>

ビルンバウムは、最後に挙げたペレツと親交があり、<sup>26)</sup> 1905年には彼の選集を、『J. L. ペレツ、物語とスケッチ』(J. L. Perez, *Ausgewählte Erzählungen und Skizzen*) という題名でベルリンの出版社から発表している。その翻訳に関しては、ウィーンでイディッシュ語詩人として活躍したメンデル・ノイグレッツェルが、「イディッシュ文学の他の翻訳者とビルンバウムの相違は(中略)ビルンバウムが、自分の翻訳を生きたイディッシュ語へのたんなる橋渡しとみなしていたことである」と評している。<sup>27)</sup> だが、先の評論同様、翻訳に付された「序文」<sup>28)</sup> には、イディッシュ語文化を測るものさしとして、ヨーロッパ、とくにドイツを指示するコードが頻繁に姿を現わしている。物語に現われるハシディズム(ユダヤ敬虔主義運動)の興りを説明するさいには、「ディオニソスの必要性」(dionysisches Bedürfnis)などの言葉が用いられ、また、とくに「魂」(Seele)が頻出し、作家を「魂の画家」(Seelenmaler)と喩えるのをはじめ、わずか6ページ足らずの文章に実に6回以上も用いられている。

このように、イディッシュ語をヨーロッパの水準に無理にでも引き上げようとするビルンバウムの言説は、今日の日からすれば権威主義的と映るかもしれない。さらに、彼が基準としている英語の話者が、「力強い民族」と評され、その「一つになった精神とイギリス民族の存在は疑うべくもない」など説かれるのを目にしたり、<sup>29)</sup> シオニズムとは一線を画していたはずのビルンバウムが、領土に結びついた権力<sup>30)</sup>に言及していたりするのを見ると、権威主義的どころか帝国主義的であると捉えられても仕方がない。だが、当時の東欧においてイディッシュ語がさまざまな運動の二次的な役割に甘んじ、その一方で同化策によって排除されつつあった状況を念頭にあげば、ビルンバウムの主張もイデオロギーだと簡単に片付けられなくなる。また、じっさいには、いくらイディッシュ語を「ヨーロッパの文化語」と評しようとも、それが現実に東欧のユダヤ人と西欧のユダヤ人に影響を与えなければ意味がない。こうして、

言語の認知を求めたビルンバウムの評論は、言語も含めた「民族文化」の認知としての「文化的自治」を推進する方向へと政治色を強めはじめた。

## 2. 「文化的自治」<sup>31)</sup>をめぐって

19世紀末における東欧の状況はユダヤ人のアイデンティティを大きく揺さぶった。社会経済的変革、精神的変化、政治的困難にさらされ、宗教的コミュニティは萎縮した。また、頻発するポグロム、ユダヤ人の排斥運動などは、ようやく手にした同権を現実には無効にするものであった。ロシアに興った革命運動に加わるユダヤ人も現れはじめ、旧ポーランド地域ではさまざまな社会主義運動が活発になった。とくに、1897年にヴィルナに設立された「リトアニア、ポーランドそしてロシアにおける全ユダヤ労働同盟」、通称「ブンド」は、社会主義とユダヤ文化の擁護を掲げ、広く東欧に活動を展開した。さらには、18世紀のおわりになってハンガリーで興ったシオニズムの思想も、アブラハム・マブの散文によって知られるようになり、現代シオニズムの父レオン・ピンスカーの著作を経て、東欧圏に拡大していた。<sup>32)</sup>

しかし、こうした一般的状況は、イディッシュ語の話者を多数抱える帝国東部のガリツィアに必ずしも当てはまったわけではない。この地域は、16世紀のウクライナ開発以降ユダヤ人の主要な居住地となっていたが、<sup>33)</sup> 前世紀の転換期には、オーストリア全体のユダヤ人のおよそ三分の一にあたる81万人強の人々が居住していた。<sup>34)</sup> その半分は商業ないしは飲食業（とりわけ酒場経営）に就き、三割強の人々は、ドロホピッツに興った石油工業の進展と共に産業や工業に従事して労働者階層を形成した。前者の人々は酒造販売の特権を認められていた貴族階層と対立し、一方、後者の人々、とくに伝統的な職人は、機械の導入によって大規模化した産業に駆逐される憂き目にあっていた。<sup>35)</sup> こうしてガリツィアにおいても社会主義への気運が高まったが、当地ではブンドなどのユダヤ文化よりの政治運動は発展せず、<sup>36)</sup> ポーランド社会民主党の活躍が目立った。彼らは、貧困対策として同化を推進し、保守的なポーランド貴族とユダヤ人の中産階級を槍玉に上げ、その一方でハシディズムを徹底的に批判した。<sup>37)</sup> 他の東欧地域とは異なり、ガリツィアではユダヤ文化を擁護する運動は勢力を持たなかった。

ポーランド人社会への同化が進み、イディッシュ語が廃れてゆくのを危惧したピルンバウムは、1905年頃から次第に政治色の強い評論を発表しはじめる。この時期に発表された『東方ユダヤ人の使命』<sup>38)</sup>には、相変わらずイディッシュ語の評価が見られるものの、タイトルから推測されるように、イディッシュ語の話者に対して行動を呼びかける内容となっている。ピルンバウムによれば、文明を手に入れたが、固有の文化を失ってしまった西欧のユダヤ人は、生活に土台をおく文化を体現し、さらにそれを新たな形態へつくり変えることのできる東欧のユダヤ人に倣うべきだという。そして、その実践策として「言語と文学の育成」が挙げられている。それは、イディッシュ語に関する、作家と文献学者の会議の開催、言語・文学・演劇などの協会の設立を指す。こうした活動を通じてイディッシュ語は広く認知され、最終的には国家に承認を受けて教育機関での使用に至るといふ。

ここで、ピルンバウムが挙げた実践策を理解するために、当時のオーストリア帝国における言語と民族の関係について触れておく必要がある。1867年に改定された帝国憲法では、国内の民族の権利について次のように記されていた。「一、オーストリアのすべての民族は平等である。すべての民族は、その民族の特性と言語を守り育てる全面的権利を有する。二、教育、行政および公共の場においては、その地域で使われている言語の平等性が国家によって保障される。三、複数の民族が居住する州では、公的教育機関は、どの民族もほかの民族言語の習得を強制されることがないように、つまり自己の民族言語で教育を受けられるように手段を講じなければならない。」<sup>39)</sup>

この条項は、一見すると教育等における民族の平等を保障するかに見えるが、その実さまざま問題を含んでいた。たとえば、第一項に記された権利主体の「民族」は何を基準に規定されるのだろうか。憲法が公布されてから十数年の間、オーストリア政府はこの「民族」を国勢調査の際の自己申告によって規定し、1880年以降は言語調査によって規定した。<sup>40)</sup> だが、この新たな規定法にも大きな問題があった。言語調査に当たって基準となったのは、それぞれが用いる「日常語」であった。「日常語」とは、生活環境の中で用いられる言語であり、「母語」ならびに「家庭語」に對置される言語である。つまり、その地域のマジョリティが用いている言語をもとに「民族」の帰属を決定していたというわけ

である。<sup>41)</sup> この規定法に従う限り、地域のマイノリティの権利は認められない。それはガリツィアのユダヤ人にも当てはまった。彼らはイディッシュ語を母語とし、「家庭語」はイディッシュ語の他に、ポーランド語、ドイツ語ないしはウクライナ語を用いていたが、「日常語」としてはイディッシュ語以外の三つの言語のいずれかを用いていたからである。そのため、ユダヤ人は法文上の「民族」にあらず、したがって条項で保障された権利の主体となることができなかった。

このように、言語の認知は民族としてのユダヤ人の承認を意味し、それゆえビルンバウムは具体的実践策を提示してみせたのである。もっとも、この評論には、前節で見たようにイディッシュ語をヨーロッパの基準に引き上げようとする見解は見られず、それどころか一見イディッシュ語とは無関係に思われる、東欧のユダヤ人の生活文化、そして経済的背景の説明に終始している。なぜビルンバウムは、評論の方向を具体的な提案へと変えたのだろうか。

伝記的資料が不足しているため、ビルンバウムが方向転換した理由は推測に頼るしかないが、その大きな要因となったのは、1905年のロシア革命と、1907年に予定されていたオーストリア帝国の普通選挙であったと考えられる。<sup>42)</sup>

ロシアでは1881年の皇帝暗殺以降、ユダヤ人の社会生活はさまざまな法令によって締めつけられていたが、1905年にはシオニズムと社会主義運動の協力によって選挙権が獲得され、その後もロシアにおける「領域的自治」と民族としての認知を掲げて運動は続いていた。この運動に刺激を受けて、オーストリアのシオニズム、社会主義の各派はこぞって自治を唱えはじめ、<sup>43)</sup> ユダヤ人に限らず、帝国内部でマイノリティとして権利を得ていないウクライナ人もこれをきっかけに自治運動を開始し、ユダヤ人の社会主義運動との提携も見られたという。<sup>44)</sup> 一方のオーストリア普通選挙が方向転換に関わった点については、じっさいにビルンバウムがその選挙に出馬したという事実の他にも、選挙を目前に控えて発表された『自律的なユダヤ人の政治について』<sup>45)</sup> に、ロシア革命とのつながりで超党派組織の構想が示されていることから分かる。おそらく、この二つの出来事に影響を受けたビルンバウムは、シオニズムと社会主義が手を組むことによって、東欧のユダヤ人も自治権要求に成功すると考えはじめたのだろう。

もっとも、ビルンバウムの念頭にあった自治は、シオニズムや社会主義による政治イデオロギーの主張としての自治ではなかった。先の評論では、シオニストとユダヤ民族党のモラヴィアでの集会において「相対的な自治」が達成課題に議決されたことを受けて、「そもそも民族の帰属（Nationalität）は政治的原則から考えなくてはならないのか」と問いかけている。<sup>46)</sup> ビルンバウムにとって「民族の帰属とは、決して政治的な原則ではなく、文化的な原則」であった。<sup>47)</sup> また、ブンドをはじめとする社会主義運動については、「彼らの階級闘争の観点からすれば（中略）今以上に諸民族を配慮するのは不可能であり、それゆえ国際的な党派の結合を越えることは許されない」と断じている。<sup>48)</sup> ビルンバウムのいう自治とは、さまざまな運動によって獲得されるべき政治的課題ではなく、むしろ与えられて当然の権利であり、それどころか自治さえ認められれば、それぞれの民族による政治運動は治まって政局が安定すると考えられていた。<sup>49)</sup> そして、それが実現するためには、「すべての意識的なユダヤ人の政治家たちが、固く、目に見える形で、力を集中し、そうすることでその力を高める、そういう結合だけが、今必要なのだ」と訴えている。<sup>50)</sup>

この自治の担い手とされたのは、以前からイディッシュ語の担い手と捉えられていた労働者階級であった。ただし、たとえ労働者階級に未来を託していても、ブンドのように階級闘争による世界革命をビルンバウムが考えていたというわけではない。むしろ、労働者階級には手放して将来を託し、その一方で、ガリツィアの中産階級に対しても、ウィーンなどのオーストリア西部に居住するユダヤ人、いわゆる「同化」ユダヤ人と異なる反応を期待していた。先の評論と同じ時期に発表された『オーストリアにおけるユダヤ民族』<sup>51)</sup> では、ガリツィアにおけるブンドの分派として結成された「ユダヤ民主主義党」に献辞を贈りながらも、「民族的同権を獲得する」のは「ユダヤのブルジョワジーの歴史的使命」であると論じている。<sup>52)</sup>

以上の自治の特徴をまとめたものが、『オーストリアにおけるユダヤ民族』に次のように述べられている。

当地（オーストリア帝国 引用者注）では、われわれの民族的主張のため、そして、より純化をみる民族主義の見解を打破するために、不

利な立場にある他のマイノリティと結びついてうまく活動できるだろう。そして、ブルジョワジーも、労働者も、共に一つの作業に参加できるだろう。その作業とは、諸民族が、より高貴に、より自由に生きる、偉大で実際的な見本となるもの、つまり、民族の自治である。<sup>53)</sup>

だが、このような言説が労働者にどれほど訴えかけたかは疑問である。じっさい、ビルンバウムがいくつもの評論を通して描き出したのは、ユダヤ民族文化の未来の担い手としての労働者階級であり、それはいわば夢物語であった。ビルンバウムから献辞を受けたブンドの分派がガリツィアで勢力を伸ばせなかった事実がこれを端的に示しているだろう。<sup>54)</sup> ガリツィアの多くのユダヤ人にとっては、相変わらずハスカラ以降の同化傾向と、中産階級と貴族階級への敵対意識が強かったのである。

1907年にオーストリア普通選挙が実施されたとき、議員として立候補したビルンバウムは、多くのユダヤ系候補者と同じように、ウクライナ人と連携してポーランドの貴族階級を激しく批判した。この選挙によって三人のユダヤ民族主義者が選出されたが、ビルンバウムは当選しなかった。<sup>55)</sup> その原因として、ポーランド人による選挙妨害と選挙会場の混乱が指摘されている。<sup>56)</sup> だが、先にも見たように、ビルンバウムが展開した評論は、文化を強調する理想論であった。肝心の労働者にとっては絵に描いた餅にすぎず、現実の社会生活を変革するすべを持たないと考えられた可能性は十分考えられる。事実、翌年に開催されたイディッシュ語に関する世界最初の言語会議もイデオログの集会和化し、ビルンバウムがその担い手と想定して来た労働者階級と乖離する結果となった。

### 3. チェルノヴィッツ言語会議

1907年の選挙に敗れたビルンバウムは、政治活動に頼らずにイディッシュ語の認知度を高めようと、すぐに言語会議の準備にとりかかった。ウィーンでの学生時代より彼を支持していたグループがその支援に当たり、開催地を帝国東端の都市チェルノヴィッツに定めて着々と準備を進めた。当地はイディッシュ語の中心地ではなかったが、他の地域に比べてイディッシュ語擁護の立場に立つ知識人が多く、また、ビルンバウム自身も数年前からここに居住していた。<sup>57)</sup>

会議の開催にあたっては、各国からイディッシュ語の有識者が招待さ

れた。その総数は70人ほどであった。そして、ロシアから訪れた作家のペレツ、アッシュ、レイゼンなど14名を除いては、会議そのものの評価が危ぶまれる構成になっていた。というのも、ルーマニアからはわずか1名しか訪れず、ガリツィアとブコヴィナからは学生、商人、手工業者を中心に55名が足を運んだものの、これらの人々は、討議に遅刻し、会議の議決のときには欠席するというあり様であった。さらには、地域の労働者が会議のパーティの「ごちそう」を狙って闖入する一幕も見られた。<sup>59)</sup>

もっとも、会議そのものは、ビルンバウムの開会の挨拶、ペレツ、アッシュなどの基調講演、そして討議と滞りなく進行するかに思われた。実は、前もってビルンバウムと数人の有識者の間で協議がもたれ、会議にさいして守られるべき条項と、イディッシュ語に関する10の提言が定められていた。その条項とは、会議を政治の手段としないことと、問題の解決にはイディッシュ語を最優先するというものであり、一方の提言とは、イディッシュ語の表記、文法などに関する四つの提言と、イディッシュ語の出版物、演劇などメディアについての四つの提言、そしてイディッシュ語を担う次世代についての提言と、会議の主要目的であるイディッシュ語の認知に関する提言であった。<sup>59)</sup> だが、会議で生じた対立は、そうした事前の打ち合わせの予想をはるかに凌ぐものであった。その対立とは、イディッシュ語とヘブライ語をめぐるものだった。

先にも述べたように、19世紀末から20世紀初頭にかけて展開したユダヤ人の運動においてユダヤの伝統文化は二つの位置づけを与えられていた。一つが、ブンドやガリツィアのシオニズムに見られる伝統を重んじる立場であり、いま一つがポーランド社会民主党に賛同したユダヤ人に見受けられる伝統を否定する立場である。ただし、イディッシュ語はこの伝統に対する二分法に当てはまらず、それぞれの運動において複雑な位置づけが与えられていた。たとえば、ブンドとシオニズムは、共にイディッシュ語を「教化」の手段として採用していたが、当座の自治権獲得に比重を置いてイディッシュ語を「民族語」と定めていたブンドに対し、シオニズムにおいてイディッシュ語はあくまで手段であり、「民族語」の地位を得るのはヘブライ語でなくてはならなかった。<sup>60)</sup> 会議に参加したそれぞれの運動家の見解の相違によって、イディッシュ語の位置づけが困難になったのである。

会議の主催者であるビルンバウムは、こうした紛糾を予想できたと考えられる。彼は、早くもシオニストとして評論活動を展開していた時期から、ユダヤ人内部でのイディッシュ語とヘブライ語の位置づけに注目し、イディッシュ語主義の運動に関わってからは一貫して二つの言語の役割を区別して論じていたのである。先に見た 1902 年の評論『ヘブライ語とユダヤ語』では、シオニズムとブントそれぞれの主張をしりぞけつつ、イディッシュ語とヘブライ語が同時に発展するという「特殊な並行主義」を説き、また、暗にシオニズムを批判して、「ユダヤ国家」建設の暁には、ヘブライ語が民族語となるどころか多数派のイディッシュ語がそれにとって代わると論じている。<sup>61)</sup> また、1904 年の『ユダヤ民族の言語』においては、先の評論を前提に、ヘブライ語をさまざまなグループの「日常の交際」に用いられる言語とし、出身地域の言語的相違を埋める役割をヘブライ語に付与した。<sup>62)</sup> ビルンバウムは二つの言語のいずれかを選択するのではなく、あくまで二つの言語を共存させようとしていたのである。

だが、この一見したところ現実的に思われる見解が、言語会議においてシオニズムとブントの対立を生み出す原因となった。それは、とりわけヘブライ語を評価する言説に見られた。たとえば、『ユダヤ民族の言語』においてビルンバウムは、ヘブライ語にいわばシンボルとしての価値を認めているが、それはシオニズムが用いた論理と同じであった。ビルンバウムにとってヘブライ語とは、「シナゴークのように、それ自体が民族にとって必要なもの」であり、「いかなる時もシナゴークと一つに結びついて働き、それどころかシナゴークがその内部に抱える分裂もろとも克服して、民族の統一感情と、その意志の、目に見える表現として働く」言語であったが、<sup>63)</sup> 当時のガリツィアのシオニズムが掲げていたのは、「シナゴークに保たれているような、ユダヤの生活形態への回帰」だったのである。<sup>64)</sup>

社会言語学者であり、ビルンバウムの伝記作者でもあるフィッシュマンは、言語会議を「言語拡大」(spread of language) の失敗例としているが、その主たる原因は、日常語としての機能を果たしていたイディッシュ語が、文化的な役割を担っているヘブライ語に社会的政治的に十分対抗できなかったからだという。<sup>65)</sup> たしかにフィッシュマンが指摘するように、当時のガリツィアにはヘブライ語の他にも、ウクライナ語、

ポーランド語、ドイツ語と、選択肢は多かった。だが、会議を開催した当事者に、二つの言語を共存させようという意志があった以上、イディッシュ語を「ユダヤ民族語の一つ」とする以外に道はなかったのではないだろうか。

## おわりに

ビルンバウムのイディッシュ語主義者としての活動期を振り返ると、彼のイディッシュ語に関する言説は、文化的側面の強調とは裏腹に、常に政治的意味合いを帯びていたことが分かるだろう。とりわけ第二節で論じた「文化的自治」には、こうした傾向が顕著である。「民族の帰属」を「文化的な原則」としながらも、じっさいにはシオニストや社会主義者の掲げた自治権要求の内容については触れず、その教条的側面だけを批判している。これは、おそらくビルンバウムの目指した超党派的組織の構想とも関わっていたと考えられる。彼にとって最も重要だったのは、まずユダヤ民族が相互協力のために一つになることだったのである。

そのため、ビルンバウムの言説は、表向きはシオニズムと社会主義それぞれを批判する立場を取りながらも、その実、それらと部分的に重なり合っていた。それを端的に示しているのが、イディッシュ語とヘブライ語の並行的な発展であった。だが、この現実的に映る折衷主義が、かえってビルンバウムの言説を曖昧にしていたのではないだろうか。同権獲得による階層化と産業構造の変化などに伴って多層化していたユダヤ人は、別々の政治的主張を持っていたのであり、イディッシュ語を「文化言語」と読み換え、超党派的協力による自治権要求を説くだけでは、支持者を有効に獲得できなかったと考えられるのである。

もっとも、シオニズムや社会主義の言説が支配的だった状況において、党派的イデオロギーに縛られず、イディッシュ語のハイブリッドな側面を積極的に評価した点は、今日でもその価値を失っていない。ショアーを経てようやくはじまったイディッシュ語の再評価、イスラエルの建国後に生じたヘブライ語とイディッシュ語の言語論争などを考えると、時代に先じたビルンバウムの活動の意義は見直されてしかるべきだろう。また、それと同時に忘れてならないのは、ビルンバウムの活動が、文化を政治的にしか語り得ない現代の状況を予見させているということである。

## 注

- 1) ロビン・コーエン（駒井洋、角谷多佳子訳）『グローバル・ディアスポラ』（明石書店）2001年。
- 2) ジャン・ボームガルテン（上田和夫、岡本克人訳）『イディッシュ語』（白水社）1996年。
- 3) ナータン・ビルンバウムは、1864年にオーストリア＝ハンガリー二重帝国の首都ウィーンに生まれた。長じて大学で法学とオリエント学を修め、その後学生時代より行っていた評論活動に本格的に取り組みはじめる。その活動は、シオニズム、イディッシュ語主義、正統派改革と「遍歴」に満ちていて、一貫した主張に欠けているところから「変節」とされ、とくにシオニストの側から批判が加えられていた。活動地は主としてオーストリア帝国内部であり、最初はドイツ語で、後にはイディッシュ語とヘブライ語で執筆を行い、本稿の中心となるイディッシュ語主義者としての活動期には、とくに帝国の東部ガリツィアを活動拠点にしていた。なお、本稿で用いるビルンバウムの評論は、次の選集から適宜抜粋して用いた。Birnbaum, Nathan: *Ausgewählte Schriften. Zur jüdischen Frage. Bd. 1-2.* Czernowitz 1910.（以下ではASと省略し、巻号をそれぞれ付する。）
- 4) Fishman, J. A.: *Ideology, Society and Language. The Odyssey of Nathan Birnbaum.* Ann Arbor 1987, S. 19.; Wistrich, R. S.: *The Clash of Ideologies in Jewish Vienna (1880-1918). The Strange Odyssey of Nathan Birnbaum.* In: Leo Beck Institute Year Book. 1988 XXXIII, S. 201-233, hier S. 220.
- 5) Herzl, Theodor: *Der Judenstaat.* In: *Gesammelte Zionistische Werke. Bd. 1: Zionistische Schriften. Dritte, veränderte und erweiterte Auflage.* Berlin 1934, S. 17-106, hier S. 94.
- 6) Fishman, S. 18.
- 7) Birnbaum, Nathan: *Die Juden und das Drama.* In: AS 2, S. 245-260.
- 8) Hödl, Klaus: *Ostjüdische Armut und ihre Wahrnehmung. Die galizischen Juden um die Wende vom 19. zum 20. Jahrhundert.* In: *Juden und Armut. In Mittel- und Osteuropa.* Hrsg. v. Stefi Jersch-Wenzel. Köln 2000, S. 309-332.
- 9) Ebd., S. 327f.
- 10) Ebd., S. 328.
- 11) Schulte, Christoph: *Jüdische Aufklärung („Haskala“).* In: *Handbuch zur Geschichte der Juden in Europa. Bd. 2: Religion, Kultur, Alltag.* Hrsg. v. Elke-Vera Kotowski. Darmstadt 2001, S. 240-257.
- 12) Hödl, Klaus: *Als Bettler in die Leopoldstadt. Galizische Juden auf dem Weg nach Wien.* Wien 1994, S. 113f.

- 13) Birnbaum, Nathan: *Die Sprachen des jüdischen Volkes*. In: AS 1, S. 308-325.
- 14) 「ユダヤ語」とは本稿でのイディッシュ語にあたる。ビルンバウムはこの他にも「ユダヤ ドイツ語」(Jüdisch-deutsch) という呼称を用いている。ドイツ語圏において「イディッシュ語」(Jiddisch) がいつ定着したかは不明である。
- 15) Ebd., S. 319.
- 16) Fishman, S. 19f.
- 17) Birnbaum, Nathan: *Die Sprachen des jüdischen Volkes*, S. 316f.
- 18) Birnbaum, Nathan: *Hebräisch und Jüdisch*. In: AS 1, S. 301-307.
- 19) Ebd., S. 306f.
- 20) 「東方ユダヤ人」(Ostjude) とは、19 世紀後半ごろからドイツ語圏において東欧のユダヤ人を呼ぶのに用いられた差別的呼称である。当該のユダヤ人たちは地域ごとグループごとに異なった自称を用いていたが、ドイツ語ではそうした相違を無視し、東欧に居住するユダヤ人（後には移民となって西欧に流れ込んだユダヤ人）を一括りにした（詳しくは、次の著作を参考のこと。Aschheim, S. E.: *Brother and Strangers. The East European Jew in German and German Jewish Consciousness 1800-1923*. Madison 1982.）一方、ビルンバウムは、一貫してこの呼称を西欧に居住するユダヤ人と弁別するために用いた。本稿では、「この呼称がユダヤ人内部の言語習慣より生じた」とするハウマンの議論にしたがい（Haumann, Heiko: *Geschichte der Ostjuden. Aktualisierte und erweiterte Neuauflage*. München 1999, S. 58.）ビルンバウム同様、弁別の意味で使用する。
- 21) Birnbaum, Nathan: *Die Sprachen des jüdischen Volkes*, S. 324.
- 22) 東欧のユダヤ人が居住する地域をアジアに喩えるのは、カール・エーミール・フランツォースを通じてドイツ語圏に広まっていた。彼の「半アジア」は、ガリツィア、ルーマニア、南ロシア、ブコヴィナに適用され、「ヨーロッパの文化とアジアの野蛮のアマルガム」を指していた（Aschheim, S. 28f.）
- 23) Birnbaum, Nathan: *Die Juden und das Drama*, S. 255.
- 24) Ebd., S. 256.
- 25) ジャン・ボームガルテン、前掲書 70 頁以下。
- 26) Birnbaum, Nathan: *Gäste in Czernowitz*. In: AS 2, S. 307-311, hier S. 309.
- 27) メンデル・ノイグレッツェル（野村真理訳）『イディッシュのウィーン』（松籟社）1997 年、29 頁以下。
- 28) Birnbaum, Nathan: *Vorrede zur Perez-Übersetzung*. In: AS 2, S. 291-295.

- 29) Birnbaum, Nathan: *Die Sprachen des jüdischen Volkes*, S. 318.
- 30) イディッシュ語の話者が固有の領域を持っていないと見る見解について、ビルンバウムは「原因と結果を逆にしている」として、力を持った民族になれば、どのような領域でも獲得できると論じている（Ebd., S. 323.）
- 31) 本節から分かるように、ビルンバウムは「文化的自治」は用いず、もっぱら「民族自治」( nationale Autonomie ) という言葉を使っている。しかし、その理念は、イディッシュ語の文化にもとづく自治であった。そのため、フィッシュマンとヴィストリッチは共に「文化的自治」を使用している。ここでは彼らの議論にしたがい「文化的自治」を用いることとする。
- 32) Haumann, S. 150ff.
- 33) 野村真理『ガリツィア・ユダヤ人の窮乏 ヨーゼフ時代を中心に』(『金沢大学経済学部論集』第23巻、第1号、115頁～148頁所収)
- 34) Wistrich, R. S.: *Socialism and the Jews. The Dilemmas of Assimilation in Germany and Austria-Hungary*. Rutherford 1982, S. 309.
- 35) Hödl, Klaus: *Vom Shtetl an die Lower East Side. Galizische Juden in New York, Wien*. 1991, S. 23ff.
- 36) ヘルツル以降ウィーンで広がった、外交的取引を主眼においた「政治シオニズム」と異なり、ガリツィアで展開したシオニズムは、「啓蒙され世俗化された世界と近代化に敵対し現実から目をそらしていた正統派の間」に位置し、ユダヤの伝統文化を重んじていた（Hödl 1994, S. 111f.）
- 37) Wistrich 1982, S. 312f.
- 38) Birnbaum, Nathan: *Ostjüdische Aufgaben*. In: AS 1, S. 260-275.
- 39) 引用は、大津留厚『ハプスブルクの実験』(中央公論社)1995年、42頁より。
- 40) 前掲書 46 頁以下。
- 41) 前掲書 48 頁。
- 42) フィッシュマンは「文化的自治」と選挙を何の保留もなく接続しているし（Fishman, S. 28f.）一方のヴィストリッチは、選挙に至るまでの過程を全く無視している（Wistrich 1988, S. 225.）また、二人ともビルンバウムにおけるロシア革命の影響には触れていない。
- 43) Haumann, S. 159f.
- 44) Wistrich 1988, S. 225f.
- 45) Birnbaum, Nathan: *Über selbständige jüdische Politik*. In: AS 2, S. 125-144.
- 46) Ebd., S. 138f.
- 47) Ebd., S. 139.
- 48) Ebd., S. 140.
- 49) Ebd.

- 50 ) Ebd., S. 144.
- 51 ) Birnbaum, Nathan: *Die jüdische Nation in Österreich*. In: AS 2, S. 145-159.
- 52 ) Ebd., S. 158.
- 53 ) Ebd., S. 159.
- 54 ) Wistrich 1982, S. 311f.
- 55 ) Wistrich 1988, S. 226.
- 56 ) Fishman, S. 30f.
- 57 ) Fishman, S. 44f.
- 58 ) Ebd., S. 47ff.
- 59 ) Ebd., S. 43.
- 60 ) Fishman, S. 64.
- 61 ) Birnbaum, Nathan: *Hebräisch und Jüdisch*, S. 305.
- 62 ) Birnbaum, Nathan: *Die Sprachen des jüdischen Volkes*, S. 310.
- 63 ) Ebd., S. 311.
- 64 ) Hödl 1994, S. 112.
- 65 ) Fishman, S. 59ff.

( 京都光華女子大学非常勤講師 )